

「流れ学第二」試験対策委員会標準表記法

ossan-arrow

2015 年 6 月 10 日

1 文章

1.1 文体

文体は常体を用いる。

1.2 句読点

文書において、読点は半角カンマ、句点は半角ピリオドを用いる。句読点の後には、それぞれ 2 分アキを挿入する。

1.3 ハイフン・ダッシュ・マイナス記号

一単語を複数行に分けて書くとき、英単語中に表れるとき、電話番号・住所・型番等の数字を区切って表記するときにはハイフンを用いる。

区間・範囲を表すときには en ダッシュを用いる。

em ダッシュは文書中では使用しない。

時間の経過を表すときや、説明・副題などを対で囲んで表すときには倍角ダッシュを用いる。ただし、表示には `okumacro.sty` で定義されたものを使用する事とする。^{*1}

- コツメカワウソ——英語では Asian short-clawed otter という——は体長 41–64 cm の小動物である。

1.4 脚注

単語や文に脚注を付ける場合、単語の場合はその単語の直後、文の場合はピリオドの直後に脚注記号を付す。

2 数式

2.1 句読点

数式は概ね一つの文として扱う。つまり、最後には句読点が付き物である。複数の数式を並べて書くときには、最後の数式以外にカンマを、最後の数式にピリオドを打つ。その後に文が続く場合には句読点は必要無い。文の後に数式が続く、かつその内容が連続している場合には、文の最後に全角コロンを打つ。

2.2 数式環境

1 行の数式には `equation` 環境を、複数行の数式には `align` 環境を使用する。行内の数式は\$で囲むものと

する。

2.3 数式番号

`equation` 環境や `align` 環境を使用すれば、自動的に数式番号が付与される：

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n f\left(\frac{k}{n}\right) = \int_0^1 f(x) dx. \quad (1)$$

読者の理解のため、以前に登場した数式をそのまま出したい場合がある。そのときは、以前の数式番号を参照した上で、末尾に“revisited”を付ける：

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n f\left(\frac{k}{n}\right) = \int_0^1 f(x) dx. \quad (1 \text{ revisited})$$

2.4 単位

単位の付いた物理量については、`numprint` パッケージを使用する事とする。

2.5 ベクトル

ベクトルを文字で表記するときには、`\bm` コマンドを使用する：

$$\boldsymbol{v} = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix}. \quad (2)$$

成分表示については `mathfunc.sty` を参照されたい。

2.6 行列

行列は`\batrix` コマンドを使用する。これを用いることで、ブラケットで囲まれた行列が表現できる。逆行列については`\inv`、転置行列は`\tr`、行列のランクは`\rank` コマンドを使用する。単位行列は I とする。例：

$$AA^T = AA^{-1} = I = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}. \quad (3)$$

行列式は`\vatrix` コマンドを使用する：

$$\det A = \begin{vmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{vmatrix} = \cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1. \quad (4)$$

2.7 テンソル

テンソルの表記については行列と等しくする。

2.8 下付き文字・上付き文字

上線等が引かれた記号を下付き文字・上付き文字で修飾するとき、それらの文字は線の及ぶ範囲外に置くものとする。プライム記号等についても同様である。

^{*1} ターミナルで『`texdoc okumacro`』と入力すると、マニュアルを参照することができる。他のパッケージについても同様。